授業デザイン

教科・科目：保健体育・保健　　令和２年８月６日（木）

実施学級：1年7組
実施場所：1年7組教室
単元名　：心肺蘇生法

1　本時の指導目標	心肺蘇生法は特別な人だけが行うことではなく、その場に居合わせた者、誰もができるように正しい手順や方法を理解させ、人命を救うことができるように指導をしていく。
2　本時の手立て	心肺蘇生法の意義と原理を学ばせ、その手順として、胸骨圧迫、気道確保、人工呼吸、ＡＥＤの使用について模範等を示しながら理解させていく。
3「深い学び」に導くための問い	問い ○人の命について問う ○命の危険性が問われたときにできることを問う ○原理（しくみ）を問う ○具体的にできることを問う ○方法（活用）を問う
	問いのレベル **■Ｉレベル　Ideas　知識、技能の習得** （基本的な事項、基礎的な事実関係、定義、基本的な概念等を確認するような問い） **■Ｃレベル　Connections　既知の知識・概念や他領域とのつながり** （教科の既習内容、他教科の内容、実生活の内容などと、学んだことの関係やつながりを理解させる、あるいはそれらとつなげて説明させるような問い） **□Ｅレベル　Extensions　応用、活用** （学んだことを全く新しい状況に応用させるような問い。答えが一つに定まらない問い。リアリティがあり、他者性を前提とした問い）

４　学習の展開			
学習活動		指導上の留意点	評価方法
導入	●心肺蘇生法の意義を理解する	○重要な臓器への酸素供給の早急な再開が救命の本質であることを理解させる。	質問
展開	●胸骨圧迫の有効性 ●人工呼吸 ●気道確保 ●ＡＥＤ	○胸骨圧迫を行うと、通常の時と比べて、どれぐらいの量の血液を送り出せるのかを理解させる。 ○拍出される血液量は、通常の３分の１程度であるが、それだけでも脳の障害防止には有効であることを理解させる。 ○感染のおそれがあるなど、人工呼吸を行うことがためらわれる場合には、胸骨圧迫のみを繰り返して行うように指導する。 ○人工呼吸は、より高い習熟度が必要な手技であり、人工呼吸をうまくおこなう自信がないために、心肺蘇生法の開始が遅れたり、何もせずに立ち去ってしまうことがないように指導する。 ○意識を失うと舌根が落ち込むため、気道確保をしっかりと行わないかぎり、口から空気を送り込んでも肺まで届かず、人工呼吸が無意味となることを理解させる。 ○ＡＥＤを躊躇なく使えるように指導する。	質問
まとめ	●手順の確認	○傷病者の発見から、胸骨圧迫までの手順の確認をさせる。 ○一刻を争う事態では、合理的な手順にそって迅速に行うことを理解させる。 ○迅速さと冷静さとの両立の大切さを理解させる。	確認 質問